

年頭所感

一般社団法人 京都府タクシー協会

会長 筒井基好

新年あけましておめでとうございます。

令和8年の新春を迎え、謹んでご挨拶を申し上げます。

コロナ以前は当たり前のインフラとして特に気にかけられることもなかつたのですが、プラットフォーマーによるグローバル化の波やオーバーツーリズム、人手不足等により、多くの人が公共交通に关心を持つ時代になりました。

昨年を振り返ってみると、コロナを乗り切り、多大なダメージを受けたタクシー事業の復活を図りつつ、ライドシェアや白タク、オーバーツーリズムなど社会問題の解決に力を注いだ年でした。

次の時代は技術面では自動運転でしょうか。ゲームチェンジャーになる可能性があります。

人手不足が取り沙汰されますが、見合った賃金を払えば、その産業に人は集まるので、私は人手不足とは思っていません。価格転嫁が必要なのです。当然将来的には少子化や人口減少に伴い、人手も不足するし、市場も縮小するでしょうから、技術革新による大幅なコストダウンを意

識する必要性は出てくるでしょう。

いずれにせよ、自動運転は公共交通機関であるタクシー事業の担い手としての「自負」と「責任」のもとに、「我々がやらなきゃ、誰がやる、誰にでもできるものではない。」「ビジネスではなく、積み上げられてきたインフラである。」

令和9年度までを交通空白解消・集中対策期間として取組方針が示されています。やるべきは自治体との連携ですが、そこを超えて共に公共交通・まちの生き方を考えることが重要で、もはや連携でなく主体的に、かつ、タクシーがどの部分で貢献できるか、他の交通機関とお互いに役割を果たしていくかが問われるところです。

地域の人たちとの対話も重要で、要望を聞くことはもちろんですが、私たちタクシー事業の有り様も聞いてもらう機会があるといい。公共交通は地域が育てるのであって、もう今の時代あって当たり前ではなくなっているのです。

～国益～という言葉のお話があると、国益とはなんぞや、となる。たいていは経済の側面から見た話ですが、決してそれだけではないような気がします。お金の部分が大部分を占めるにせよ、そこには心の豊さであったり、当たり前に享受できる安全、さらには平和や自由などいろいろな益があることを認識しつつ、タクシー事業を様々な面で満足できる業態に近づけていきたいと思います。しっかり稼げて、充実した仕事ができて、

家族と安定した仲を築きながら、社会からも感謝される、そして自身も満たされる、そういう社会をつくる一員であることも意識しながら事業経営をしていくことが私たちの使命と考えています。

私たちは創業の時代から昭和の始めより、生業を紡いできたのです。

知識と経験、信用を預かりながら、いくたびの困難苦境を乗り越え現在にいたるわけです。

これからも様々な壁にぶつかるでしょう。その度に先人たちの培ってきた技、これからの時代に活用されるAIやDXといった新技術、そしてなによりも地域の「公共交通」を支えてきた仲間たちと共に、次のフェーズへ果敢に挑戦を続けていきたいと思います。

会員の皆さんにおかれましては、どなたでもご意見や諫言を賜り、京都のタクシー事業の安定と業界の活性化に向け、お力を貸していただきたいと思います。地域で困りごとがあれば遠慮無く執行部にご連絡いただければ、直ちに駆けつけ実情を把握し、関係者と議論を重ねてまいります。

本年が地域の一員として、希望に満ち、挑戦する充実した一年となりますよう心からご祈念申し上げ、年頭の挨拶とさせていただきます。

以上